



2018年9月18日

ブラジルの不都合な事実

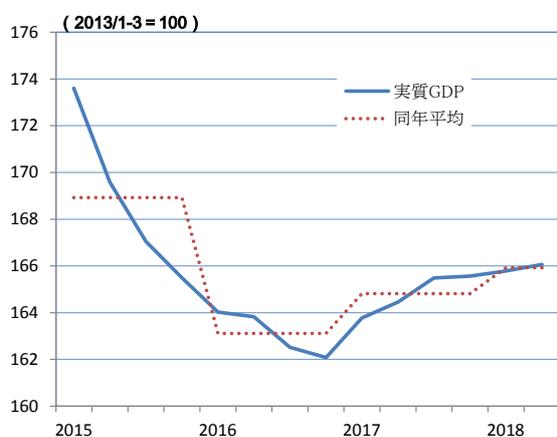
公益財団法人 国際通貨研究所
経済調査部 上席研究員 森川 央

ブラジルの第2四半期（2018年4-6月期）の実質GDP成長率は前期比0.2%増（季調済）となった。事前予想を僅かながら上回ったことで明るい兆しと報じられていたがミスリーディングである。むしろ注目すべきは、前期（1-3月期）の成長率が当初発表の前期比0.4%から0.1%に引き下げられたことである。

4-6月期の前年比は1.0%であるが、そのうち0.7%分は昨年の中に「稼いだ」ものである。2018年に入ってからの成長は、0.3%でしかない（図1）。4-6月期の低迷の背景にはトラック運転手のストライキがあったため、7-9月期には反動増が期待できるものの、それでも2018年の通年の成長率はせいぜい1%強に留まるだろう。ブラジルの人口増加率は0.9%（過去5年の平均）であるので、1人当たりGDPはほとんど伸びていない。

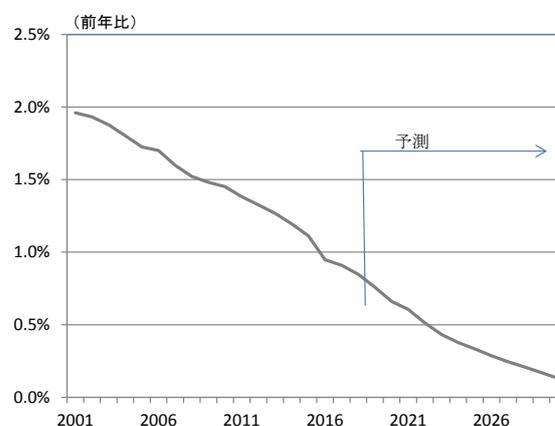
長期的な成長力にも陰りがある。ブラジルの生産年齢人口（15-64歳人口）の増加率は緩やかに低下してきており、2016年に1.0%を割り込み2018年には0.8%に低下する見込みである。今後も低下は止まらず2022年には0.5%に、2030年代にゼロに落ち込む見通しとなっている（図2）。

図1 実質GDP



(資料)ブラジル地理統計院の統計を基に国際通貨研究所作成

図2 15-64歳人口増加率

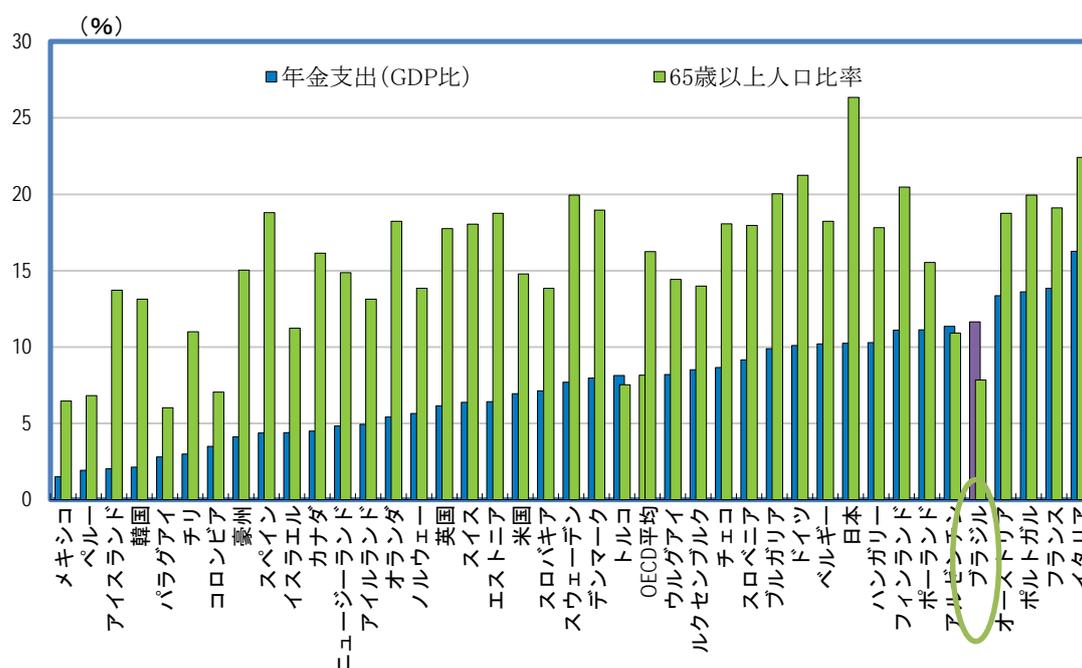


(資料)国際連合推計を基に国際通貨研究所作成

ブラジルの65歳以上人口比率（65歳以上人口の15-64歳人口に対する比率）は7.8%と低いにもかかわらず、年金支出（GDP比）は11.64%とOECD加盟国の中で5番目に高い（図3）。

今後ブラジルも高齢化が進行し、2020年には65歳以上人口比率は13.7%、2030年には19.8%、2040年には26.8%へ上昇していく。国際的にみてもブラジルの年金受給者は厚遇されており、今後、高齢化が進むと年金制度は破たん必至と見られている。

図3 OECD諸国の年金支出と65歳以上人口比率



(資料)OECD図表を国際通貨研究所一部加工

長年改革の必要性が指摘されながら、問題を先送りしてきたブラジルだが、持ち時間はよいよ残り少なくなってきた。次期大統領にかかる期待と責任は大きい。

以上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。